

香川大学教授
七條 正典

しちじょう・まさのり 道徳教育、生徒指導専攻。文部科学省初等中等教育局教科調査官を経て現職。著書に「心の教育」実践体系；第3巻 中学生の心の教育【教職研修；豊かな心の教育への経営戦略（第3巻）】他。

「伝え合う力」と豊かな人間関係

はじめに

「伝え合う力」と豊かな人間関係のことが問題とされるようになった背景には、まず、平成二年から二年にかけて、「一七歳の心の闇」と言われた少年等による一連の殺傷事件など凶悪な事件が連続して起こったことを受けて、「少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議」の報告として「心と行動のネットワーク」情報連携から「行動連携」へ（平成一三年四月）が出されたことが挙げられる。そこでは、最近の非行少年の特徴の一つとして、「コミュニケーション能力や自己表現力が低く、対人関係が結ばない」という指摘がなされている。

また、昨年六月に長崎県で起こった小学校六年生の女子児童による同級生殺害事件等を受けて、「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」（平成一六年一〇月）が出された。その報告書においては、「伝え合う力と望ましい人間関係の指導の促進」が対策の重点の柱として挙げられている。

つまり、これらの事件が起こった要因として、人間関係がうまく切り結ばないこと（人間関係の希薄化）が挙げられており、望ましい人間関係を構築するためには、伝え合う力、あるいはコミュニケーション能力が不可欠であることが指摘されている。

しかし、「豊かな人間関係」や「伝え合う力」は、問題行動を起こす子どもたちにとってだけ必要なことであろうか。「豊かな人間関係」を築くことの意味や、そのために「伝え合う力」をはぐくむ

ことの必要性について、今一度考えてみたい。

「豊かな人間関係」を築くことの意味

「豊かな人間関係」を築くことの意味について、まずは問題行動の視点から考えてみよう。

現代社会は人間関係が希薄化していると言われる。この人間関係の希薄化がもたらす問題の一つとして、「キレル」子どもの現象が挙げられる。おとなしい子どもがある日突然問題行動を起こすという現象面の特徴から、「キレル」という言葉が象徴的に使われているが、なぜ子どもは「キレル」のだろうか。

家庭内の不和、学校や地域社会における様々な軋轢が子どもの心を不安定にしている。そのどうしようもない思いや悩みが子どもの心の中で蓄積し、飽和状態となり、ある日突然コントロールを失い問題行動等の形で爆発的に噴出することになる。それは周りから見れば「突然」であり、「キレタ」ように見える。しかしその子ども視点に立ってみれば、たとえ本人にとって自覚的でないにしても、脈絡があり当然の帰結（その行動の善し悪しは別にして）であることが多い。

しかし、学校・家庭・地域社会のそれぞれにおける、あるいは相互の関係性が「キレテイル」ために、問題や悩みを抱える子どもへの対応がバラバラになったり、時間軸における連続性が「キレテイル」ために、一人一人の子どもの成長過程を十分踏まえた対応ができていなかったりする。子どもが「キレル」背景には、このような大人社会の「関係性の喪失（キレテイル）」という問題が大きく影

響を与えているのではないだろうか。

したがって、単に「キレル」子どもへの対応として問題を考えるのではなく、「キレル」子どもを生み出している我々大人社会の問題に焦点を当て、そこを改善するところから始めることが大切であると考える。つまり、現在の「キレル」ことに象徴されている子どもの問題は、我々大人社会の「キレテイル」状況を改善することによって、解決への糸口も開かれると考えるのである。

まずは、我々大人社会の関係性（豊かな人間関係）を再構築する（つなぐ）ことによって、子どもへの適切な対応を可能にすることが大切であり、そのことによって、「キレル」子どもの現象の拡大を抑止することができると考える。

次に、「豊かな人間関係」を築くことの意味について、一般的な視点から考えてみよう。

人間は、一人だけで生きていくことは難しい。互いに支え、支えられることによって、より充実し、安定した自己にとっての生き方が可能となる。そのためにも、様々な人々とのかわりを豊かにするとともに、その絆を太くすることが大切となる。そして、そのことは、一人一人の子どもが、社会の中で生きていく上での支えとなる心のネットワークを広げることにもなる。

かわりを豊かにするということは、様々な人々との出会いの場や機会を豊かに工夫することである。

特に、自らとのかかわりのある様々な人々との関係性を深めることである。「自らとのかかわりのある様々な人々」という場合、必ずしも直接的にかかわりのある人やそれまで知っている人だけを指

しているのではない。自分と同じ地域の人々や間接的にかかわりのある人、あるいは目に見えない、普段は気付くことのない人とかかわりも含め、自分の存在を支えている様々な人々である。さらに言えば、これからの人生において出会い「自らとかかわる」であろう数多くの人々との関係性を深めることを視野に入れておくことも必要である。

それらのことによって、生き方そのものをより幅のある豊かなものにすることにつながると考える。

このように考えると、「豊かな人間関係」を築くということは、問題行動の抑止の面と、より充実した生き方を可能にするという面の両面において意味のあるものと考えられよう。

それでは、次に、「豊かな人間関係」を築くために必要な「伝え合う力」について考えてみたい。

「伝え合う力」を育成するということ

「伝え合う」ということは、単に自分の気持ちや考えを相手に伝えるだけでなく、相手の気持ちや考えを受け止めることを意味している。つまり、他者の気持ちや考えを受け止めるとともに、自らの気持ちや考えを他者に伝えるなど心の通ったコミュニケーションが成立している状態である。

時々、ディベートなどの話し合いを聞いていると、言葉のバトルに終始し、いかに相手を打ち負かすかということのみ関心が集まっている場合がある。大切なことは、自分の気持ちや考えをいかに相手に理解してもらえるように伝えるのか。また、相手の気持ちや

ければ、やはりコミュニケーションは成立しないことは言うまでもなからう。

さらには、相手の気持ちや考えを受け止め、理解できるためには、相手の視点に立って考えることができる力（共感性や役割取得能力など）もあわせて高めておくことが求められる。

そのような意味から、「伝え合う力」を高める上で、次のような点を基盤にすることが必要であると考える。

「伝え合う力」を高める上で基盤となる力

「伝え合う力」を高める上で基盤となる力として、①自己理解を深める力（以下自己理解力）、②他者を理解する力（以下他者理解力）、③役割意識をもち自らの可能性を切り拓く力（以下役割意識）の三つを挙げたい。これらは、道徳の内容で示されている四つの視点（自分自身、他の人とかかわり、自然や崇高なものとかかわり、集団や社会とかかわり）とつなげて考えることもできよう。

一 自己理解力

まず自己理解力について考えてみよう。

「汝自身を知れ」とは、先哲の有名な言葉である。人間がよりよく生きるためには自らをよく知ることが不可欠である。

ここでいう自己理解力については、二つの意味がある。

第一は、文字通り、自分自身というものについての理解を深める力であり、道徳の内容の四つの視点のうち、特に第一の視点「主として自分自身に関すること」の内容を学ぶことを通して自己理解を促すことができる。

考えをいかに理解し、それを踏まえて自分の考えをより高めていくことができるかが問われているのではなからうか。

そのようなことから考えると、ただ単に言葉にのみ頼るのではなく、声の調子、喋り方、表情も含めて、まさに表現力が問われているといっても過言ではなからう。

動物写真家の岩合光昭氏が、ある英会話の番組の中で、言葉に頼り過ぎることの問題について語っていた。岩合氏は、大原で鯨が海上に飛び跳ねる瞬間を見事に写真に撮っている。じっくり観察することを通して、鯨の呼吸のタイミングや次に飛び跳ねる位置を見事にとらえるのである。

会話をしていると、その人の思いが、言葉で表現したこととぴたり一致していないこともある。口で表向き感謝の言葉を言いながら、心の中では違うことを思っているということもある。それらは、言葉だけを受け止めるだけではわからない。相手の声の調子や顔の表情など、総合しながら相手の心を察することができないと、その人の本当の気持ちや考えを理解できずに終わってしまう。つまり、コミュニケーションが成立していないことになる。

以上のことから、「伝え合う力」を高めるには、言葉の理解や知識だけでなく、相手の気持ちや考えにしっかりと耳を傾け、相手の表情をしっかりと観て、自分の気持ちや考えをしっかりと伝えることができるよう、傾聴、観察、伝達の力を身に付けることも大切であることがわかる。

そして、何よりも、自分自身にとって伝えたい内容（自分の気持ちや考え）を明確に持つことが不可欠である。伝えるべき中身がな

第二は、周囲の状況や他者とかかわりにおいて、自己の状態に関する認識を深める力であり、そのことを通して、より妥当性のある判断（状況判断・価値判断）ができるようにすることである。したがって、第二の視点の「他の人とかかわり」や、第三の視点の「自然や崇高なものとかかわり」、第四の視点の「集団や社会とかかわり」についての内容を学ぶことを通して、様々な人やことごとらとのかかわりから自己の在り方についての理解を深めることができる。

このような自己理解力を身に付けさせるといことは、単に客観的、分析的、知識的に自己をとらえるということだけを意味していない。自らの人生を前に向かって進んでいくためには、自己への信頼、自信が不可欠である。したがって、自己理解の根底には、自らをかけたがない存在として、あるいは意味ある存在として肯定的に自己をとらえるということがあり、自尊心をはぐくむことがその先にはある。

二 他者理解力

次に他者理解力について考えてみよう。

人は「間柄（あいだがら）的存在」である。他者との関係の中で生きている存在である。もう少し広げて考えるなら、環境に囲まれて生きている（生かされている）存在でもある。

したがって、自己とかかわり、自己を在らしめている他者や自然等をよく知ることが、自らの在り方や生き方を考える上で重要である。

他者理解力は、人だけでなく、自然や動植物も含めて、それらの

理解を深める力である。そして、それらは自己理解力と同様、単に客観的、分析的、知識的にとらえるということだけを意味していない。

大切なことは、自己とのかかわりにおいて理解し信頼を深めることであり、そのことによって自己の生き方につながる存在として理解が深まるとともに意味をもつのである。先にも述べたように、人間は、一人だけで生きていくことはなかなか難しい。様々な人や自然や動植物とかわるることによって生きていくことができる。つまり、いかに「かわる」かということが人間がよりよく生きていく上で不可欠な視点である。よりよく「かわる」ためにこそ、「かわる」対象である他者を十分理解することが必要となるのである。

三 役割意識

最後に役割意識について考えてみよう。

一人一人の人間は、かけがえない存在である。しかし、それは、一人であることにおいてかけがえないのではなく、誰かとのかわりにおいて初めてかけがえない存在となるのである。

私という存在は妻にとってかけがえない存在であり、私の子どもは私にとってかけがえない存在である。また、Aという私の友人は、私にとってかけがえない存在であり、私もAという友人にとってかけがえない存在である。そして、お互いがお互いにとってかけがえない存在であろうとして努力し行爲する。このことは自らが所属する集団においても同様である。

つまり、自分は、他者にとって、またはその所属する集団や社会において、どのような存在であるのか。どのような存在として認識

されているのか。かけがえない存在として認識されたいと願ったり、認識されるとき、その関係性をより深めたり維持しようとして、あるいはさらによりよい関係性を築こうとして、他者、またはその集団や社会のために自らの役割意識を高め、具体的な行動をとることになる。

つまり他者との関係性において、自らの在り方を考え、そこにおける自らの生き方を具体的な形で表現するのである。

自らと、様々な人や自然・動植物、集団や社会との関係性の中で、どのような役割意識をもち、どのような生き方を考え選択すればよいかについて、具体的には、道徳の内容の特に、第二、第三、第四の視点の内容をもとに学ぶことができる。

以上のように、「伝え合う力」を高めるための基盤として、まず、自己理解を深め、自らの気持ちや考えを明確にもつこと、そして、相手の視点に立って考えるときに、自己とのかかわりにおいて他者理解を深めること、最後に、他とのかかわりや集団や社会とのかわりにおいて自己の役割を自覚することによって、豊かな人間関係の中で自己実現を果たせるようになることが期待される。

最後に、「命を大切に教育」の視点とつなげて考えたい。

「命を大切に教育」の視点とつなげて

昨今の重大事件を犯した、問題や悩みを抱えている子どもたちを、「生きる」ことや「命の大切さ」から遠ざけているものは何だろうか。私は、その要因として、①意味(目的)の喪失、②関係性(つながり)の喪失、③愛情(信頼感)の喪失という三つをあげた

い。

まず第一の「意味(目的)の喪失」というのは、生命の大切さの意味が分かっていないというよりも、生命を大切にすることそのものに意味を見いだせていないということである。例えば、「自分は何のために生きているのか」「何を目指して生きていけばいいのか」分らないなど、現在の自分自身に存在価値を見いだせていない状態や、自分自身の未来を切り拓くための夢や希望をもって前向きに生きていくための目的を見いだせていない状態である。

そこで、子どもたちが自分の将来への夢や希望、あるいは目標ももてるよう、それらについて具体的に考え、描けるような学習の機会や場を設定し、その指導の充実を図る必要があると考える。

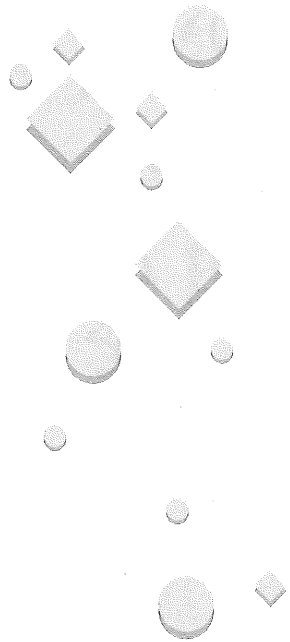
第二の「関係性(つながり)の喪失」というのは、子どもたちは、様々な人々、あるいは自然や動物などのかかわりの中で生活しているにもかかわらず、それらとの関係性(つながり)を実感できていないということである。例えば、今自分が生きていることができるのは、直接、あるいは間接を問わず、様々な人々の働きかけや自然の営みのおかげであるが、そのことを実感をもつてとらえることができていない状態である。自分は自分一人で生きているのではなく、他者と共に生きている存在、あるいは自然も含めて他者によって生かされている存在であることの実感が十分もてていない状態である。

そこで、子どもたちが自尊感情や自己存在感を実感できるよう、自らの存在を、他者との関係性の中でとらえ、自らの「よさ」に着目させ個性の伸長を促すような指導の場や機会の工夫を図る必要が

ある。

第三の「愛情(信頼感)の喪失」というのは、親子の関係、教師と児童生徒との関係、友達との関係などそれぞれの関係が、十分な愛情を伴わない関係として、あるいは信頼感が十分もてていない関係として、つまり太い絆で結ばれていないということである。例えば、最も典型的なものとしては、虐待など、自分は親から愛されていないという意識をもった状態である。場合によっては、親としては子どものためと思い、自分なりの愛情の表現の一つとして子どもに働きかけていることが、子どもにとっては嫌なことであったり、負担となっていたりして、そのストレスが蓄積された状態である。それらの結果、反社会的行動や非社会的行動などの問題行動として、親に対する反発や自分自身に対する自信の喪失という形で現れることになる。

自己への信頼(自信)や他者(友達・家族・教師など)への信頼を深め、互いの関係を太い絆で結べるよう、愛情あふれる温かい豊かな人間関係の中で、自らの役割を意識し、実践に向けて自己を活かせる指導の場や機会の工夫を図る必要がある。



「振り返り」から生まれる自信

香川大学教授
七條 正典しちじょうまさのり

辞書では、「反省」について、「自分の行いをかえりみること」、「あるいは自分で自分を観察すること」(Weblio)と書かれている。しかし、日常、親や教師が子どもたちに「反省しなさい」と言うときは、「振り返り」熟考するというよりも、マイナス的言動についての反省を促すことが多い。お猿の次郎君が調教師に「反省し」と言われて、調教師の膝につき、うなだれて反省している状況が目につく。それは、プラス面も含めて、トータルに自己を見つめた「振り返り」というよりも、マイナス面に着目し、どこが駄目であったかを洗い出しその点を悔い改めさせるという「反省的思考」の強要にとどまり、本来の「反省」とはなっていないのである。

自己をありのままに見つめる

その第一は、自己をありのままに見つめ振り返ることである。

少年鑑別所の専門官である斉藤俊郎氏は、「非行少年への『いのち』の教育」の中で、非行少年は、少年鑑別所において、自分を「見詰め直す」時間と場所を得、そこから、彼らが「自分らしく生き抜く『本当の生き方』を模索し始める輝かしいスタートを切る」と述べている。また、その一方で、様々な悩みや問題を抱えてきた彼らにとって、自分自身と向き合うことやありのままの自分を受け入れることのむずかしさについても示唆している。どちらかといえば他者から肯定的に受け止められることの少なかったと思われる非行少年にとって、これまでの自分を振り返ることは、どうしてもマイナスの視点からの「反省的思考」となり、それまでの自分の言動を悔い改めるといふものにならざるを得ないであろう。しかし、それは、決して自己をありのままに見つめることにはならない。むしろ、他者によって偏った見方をされてきた側面から自己を見つめることになり、素直な目で自己と向き合うことはほど遠いものとなる。

はなかるるか。

自分の失敗などマイナス面のみを振り返り見つめさせるような「反省」を強いることから、決して「自信」は生まれまいであろう。どこがよかったか、何ができたようになったかなどプラス面や自己の成長を中心としてトータルに自己を見つめられるような「振り返り」こそ、自己を肯定的にとらえ、自らの問題点にも着目し、よりよい成長を促す、本来の意味での「反省」につながるものと考えられる。

では、このような「自信」につながる「振り返り」が行えるためには、どのような点に留意すればよいのだろうか。

他者から、プラスの面もマイナスの面も含めたありのままの自分(本来の自己)についての理解や受容がなされることによって、はじめて、自分自身を理解、受容し、素直な目で自己と向き合うこともできるようになるのである。その意味から、自己をありのままに見つめられるようになるためには、他者からの理解や受容が大前提となる。

他者を鏡として自己を見つめる

第二は、他者を鏡として自己を見つめ振り返ることである。

平成十二年十一月、第三十四回全日本中学校道徳教育研究大会が京都において開催されたことである。会場校である弥栄中学校の三年生の授業において、次のような場面が見られた。

一人の男子生徒が、「悪いことばかりしてたらあかん」とこれまでの自分を振り返り、進路のことや親孝行をしたいという自らの思いを一生懸命語っていた。そして、その思いを受け止めた仲間の一人が、悪いことをしてきたのは必ずしも彼だけのせいではないことを弁護するとともに、三年になって学校で毎日勉強に取り組む頑

張っている彼の姿を評価し、今からでも頑張ったら「公立の高校に行きたい」という彼の願いはきつとかなうという励ましの言葉を返していた。そのやりとりで触発された一人の男子生徒が、立ち上がって、涙ながらに語り出した。彼は、毎日のように周囲から勉強しろ、頑張れと言われストレスをため、いらだっていた。「皆、頑張れと言う。でも、僕はこれ以上頑張れんや」と、彼は、その苦しい心情を涙ながらに語った。しかし、その後、先の級友のやりとりを聞いて、そのことに負けずまた一から考えていきたいと前向きな考えを述べていた。

周りから自らの課題点を指摘されるだけでは、素直に反省しそのことを前向きにとらえ自らに生かすことはなかなかむずかしい。しかし、この授業の中で見られたように、同じような思いで悩んでいる友だちの前向きな視点に触発されることによって、もう一度冷静に自らを振り返り、新たな展望を見いだすことができていた。

つまり、説論するという一方的な働きかけだけではなく、同年代である友だちの考えに触れるなど共感性を高める環境や機会を設けることによって、その考えを鏡として子ども自らが「振り返り」を豊かにすることができると考える。

だけ具体的に把握し、その課題の達成に向けての視点を明確化しておくことである。

たとえば、ある時点(起点)で、「だれに対してもやさしく接することができるようにになりたい」と自分の課題を設定したとしよう。「だれに対しても」という場合、今の自分はだれに対してはやさしくでき、だれに対してはやさしくできていないのか、また、「やさしく接することができるように」という場合、今の自分は、どのような接し方であるのか、どの程度のやさしさの発揮ができていのか、あるいは、自分は「やさしさ」をどのよなものとしてとらえているのかなど、その時点における自己の「やさしさ」の状況に関して、できるだけ具体的に把握しておくことが、「振り返り」を確かなものとする上で大切である。

このように、「振り返り」を実りあるものとするためには、振り返る時点になってはじめて「振り返り」を促し考えさせるのではなく、「振り返り」の起点に立ち返らせ、そこでの自己の状況と現在の状況とを比較させることができるよう、あらかじめ、起点を明確化しておくことが大切である。

その際、当然親や教師は一般的な価値観、あるいは他

「振り返り」の起点の明確化

ただ漠然と「振り返り」をさせても、ただの反省のための反省に終わり、実りあるものとはなりにくい。

そこで、第三としては、実りある「振り返り」のために、まず何よりも、子どもたちが振り返るときの起点を明確にすることである。

「今どうであるか」「現在だけを見つめさせるのではなく、「いつと比べてどうなったか」「過去と対比させながら見つめさせることにより、自己の成長や変化を確かめることができる。そのためにも、いつの自分と比べるか、その「振り返り」の起点を明確にすることである。

「振り返り」の起点を明確にするというのは、一つには、自らの成長に向けての課題を明確に把握するということである。漠然とではなく、自分自身にとって、どのようなことが達成すべき課題であるのか焦点化を図り、それを明確に把握することである。そのことが明確にならなければ、漠然と過ごすことになり、「振り返り」をしようとしても、どこに立ち返ればよいか、その起点が見えないことになる。

二つには、振り返る起点における自己の状況をできる

の子どもと比べるのではなく、一人ひとりの子どもの課題およびその時点での課題に関する状況から、その子の伸びに着目して評価する姿勢が求められよう。

よさを見つめ成長を実感させる「振り返り」

第四は、よさを見つめ成長を実感させる「振り返り」を促すことである。

子どもが、自らの成長を実感できるのは、やはり、他者から自らのよさを認められ評価されたときであろう。他者からの共感的な理解によって、自己肯定感も高まり、そのことがひいては、自らの成長を促すエネルギーともなる。そして、自信をもつことにつながる。

そのためにも、まず教師は、子どもの視点に立った受容的・共感的な姿勢を指導の基本とするともに、子ども相互が互いを認め合う共感的な人間関係を大切にしたい学級づくりに努める必要がある。

また、ある一定の価値観や他の子どもと比べて評価するのではなく、多面的・多角的な子どもも理解に努め、一人ひとりの子どもがもっているよさを発見し、それを引き出し、伸ばすことができるよう努める必要がある。そのためにも、一人の教師の視点からだけでなく、他の教

師や保護者、地域の人々などできるだけ多くの目を通して子どもたちを多面的・多角的にとらえ、そのよきを見いだし生かせるよう工夫する必要がある。

さらには、子どもたちの内面を少しでも確かにとらえ、教師だけでなく子ども同士が互いにそのよきに触れ合えるよう、常日ごろから日記や生活ノート、朝や帰りの会での話し合い活動、道徳の時間の確保とその充実など、心を豊かに表現する場や機会を工夫することである。

「心のノート」を活用した「振り返り」

最後は、全国の小・中学生全員に配付されている「心のノート」の有効な活用による「振り返り」の場を工夫することである。

中学生へのモニタリングの調査からは、「心のノート」について、「落ち込んだときに新たに自分を見つめ直せる」「ノート、「わかっているようでわかっていない自分」がわかる」「ノートなどと受け止めている声が聞かれた。

子どもたちが、「自分がしの旅」に出発しようとするとき、当然そのための手掛かりとなるガイドブックが必要となる。「心のノート」は、子どもたちが、現在の

自己を見つめ、自らの未来を切り拓いていくために、どのように自らを見直し、創造していけばよいかについて、じっくりと考えるための「心のガイドブック」である。

子どもたちが自信をもって自己を振り返れるよう、その有効な活用が望まれる。

【参考文献】

- (1) 斉藤俊郎「非行少年への『いのち』の教育」『現代のエスプリ』NO三九四、至文堂、二〇〇〇
- (2) 七條正典「生徒の心に生きる道徳授業」『中等教育資料』六月号、文部科学省、二〇〇一
- (3) 七條正典「一年間の子どもたちの成長を見つめ、実感させる」『道徳教育』三月号、明治図書、二〇〇五
- (4) 七條正典「心のガイドブックとしての『心のノート』」『道徳教育』九月号、明治図書、二〇〇二